



マリー・アントワネットの侍従たちが、彼女のドレスを映えさせるために黒い服装をさせられたことから男の礼装は黒になったという一説が、この説の真偽は不明だが、正統派のタキシードの着こなしは、確かに女性を引き立て美しく見せる  
Photo by Reuters/AFLO

# エレガンスの社会学

## その着こなしに理由アリ

文 中野香織

### 第6回

#### 第

60回記念大会ということで、2007年のカンヌ国際映画祭は、例年以上に映画人結集！感が強かった。出品された作品を見られるのは後になるが、即日に配信されるレッドカーペットを歩く映画人の写真から、その人の今の勢いとか人となりみたいなのが伝わってくることもある。基本的に「ブラックタイ」で装う男の場合はひとしお。

実力と知名度と愛され方において北野武監督のレベルまでいけば、それはもう、和装であろうとカッラであるうと、何を着ても揺るぎなく北野監督であろう。カール・ラガーフェルドの変則ブラックタイだって、ほとんどアイコン化したカール大帝スタイルとして誰も真似ができないところに意義がある。ガス・ヴァン・サント監督の白黒ボウタイはさり気なくキュートで繊細、彼の作品をどこか思わせるし、アラン・ドロンのノータイスタイルだって、カンヌの主というか殿堂入り(?)ベテランの余裕の表れと見えた。

#### そ

んなこんなの、さすが役者揃いのレッドカーペットブラックタイの中でも、ひとときわ神々しいオーラを放つのが、ブラッド・ピットである。

黒いミニドレスのアンジェリーナ・ジョリーをエスコートするブラッド・ピットは、これぞ正統派という、いつさいの崩しも省略もないタキシード姿。シャツはステイプルフロントで、ピークドラベルのジャケットの下にはクラシックな黒のイブニングウエストコート(これがきいてる)！最初から成形されたタイではなく、ちゃんと手で結ばれたボウであることがわかる、形が完璧すぎない(これがいいのだ)ボウタイ。『華麗なるギャツビー』のロバート・レッドフォードの再来かと思

った。アンジェリーナ・ジョリーががっしりと守り引き立てながらも、自分を主張しすぎず称賛のまなざしをひきつける。ブラックフォーマルのお手本として教科書に載せたいようなお姿であった。

そのブラビが、ジョージ・クルーニーやマット・デイモンら「野郎」ばかりと並ぶときにはイブニングウエストコートを省略しているのも、芸が細かい。一人だけ違うことをやらない、場に応じた配慮に、彼の人柄がしのばれる。

それにしても、勢いのある男ばかりの「オーシャンズ」組もやはり正統派のブラックタイ。へんにいじくり回さないクラシックなタキシードで、悠々たるかっこよさである。フランク・シナトラとラット・バックが笑いさざめく50年代の写真がオーバーラップする。100年変わらぬタキシードは、100年分のいい男たちの残像をも映し出す。

#### 近

年のレッドカーペットのブラックタイを振り返ってみれば、80年代後半あたりから「クリエティブ・ブラックタイ」なるものがわが物顔をきかせていた。フォーマルを着崩し、その人なりの個性を加え

## レッドカーペットはブラックタイのランウェイ!

た「クリエティブな」(笑)着こなしが称賛されていた。タイの代わりにスカーフをあしらうとか、シャツも黒にしたりTシャツにするとか。タキシードにジーンズを合わせるトレンドも、この気分から派生していったようだった。



「オーシャンズ」仲間と一縷のときは、描省略 Photo by Getty Images /AFLO

「服がうるさい」にも飽き飽きする気分が生まれたのか、ケリー・ダラントの面影を見たくなるようなジョージ・クルーニーが脚光を浴び始めたころから再び、クラシックなタキシードを普通に着こなすのが最高、という流れに向かっている。

というわけでフォーマルは崩さず、小手先のアレンジなど加えず、王道をいこう！という話なのだが、崩さないことを勧める根拠には、女から見たもう一つの理由がある。それは、脱いだとき、寛いだときの色っぽさ、である。例えばパーティが終わった後、ごちんまりとしたバーのカウンターでほっと一息ついたしるしにボウタイをはらりとほどく瞬間。ひょうたん形に垂れるタイのなんとセクシーなことか。新生ジェームズ・ボンド、ダニエル・クレイグが最も魅力的に見えるのも、ほどけたボウタイのタキシードでアクションするお姿である(だからこそ、成形済みのボウタイじゃだめなんです)。

タキシードの上着を脱ぐのは私には書いてあり、確かにむき出しのフォーマルシャツはどこか間の抜けた感があるのだが、実はついこの間

脱いでもサマになるフォーマルシャツを発見した。「ユナイテッドアローズ」のクリエティブ・ディレクター、鴨志田康人さんがプロデュースするヌード織り(黒いヌードシルエットの美女柄が、白地にちりばめられている)のフォーマルシャツである。上着を着ている間は普通のフォーマルシャツに見えるが、上着を脱いだらサブライズ！端正な顔して、脱いでみたらこのギャップ、というのが小粋。

「この秋冬はオトナをターゲットに商品を展開しています。フォーマルの需要も高まっております。フォーマルはあくまでも下げずに、フォーマルを遊ぼう、フォーマルを楽しもう、という考えで作りました」

発想のヒントはどこから? 「90年代にロンドンのジャーマン・ストリート界限で、カバがバレリーナのチュチュを着たシャツが3色で出ていたのが印象に残っています。英国紳士のユーモアを垣間見た気がしたんですよね」

オフステージで見る、ユーモラスでセクシーな男の顔に女は弱い。でもこの顔はオフステージでの隙のない端正あってこそひとときわ生きたる。二面性、ひいては男の幅と奥行きを演出できる本格フォーマル、レッドカーペット以外の場所でも楽しませてはソンカもしれません。

### Kaori Nakano

服飾史家。人に会って、話を聞き、そして書くのがライフワーク。UOMOが掲げるエレガンスを、毎回人物を切り口にしてわかりやすくひとときします。「モードの方程式」が男のファッションをめぐる鼎談を収録して新編文庫になりました。